

# 資料を集積し、情報を読み解く

## 仮名垣魯文の啓蒙活動一斑

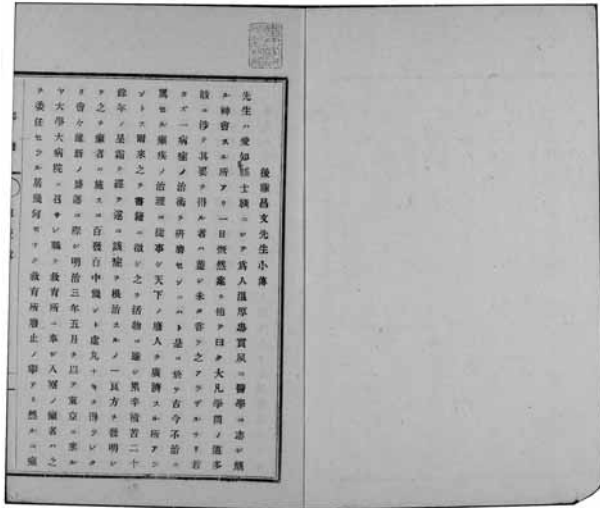


図2 『起廃病院医事雑誌』第一号

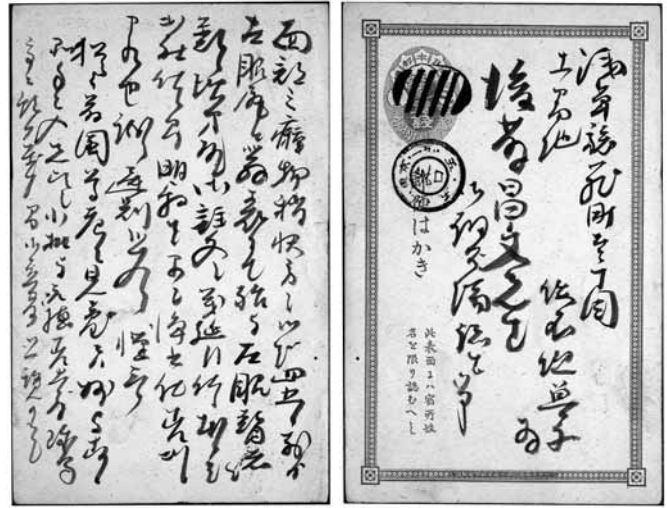


図1 後藤昌文宛仮名垣魯文葉書（表・裏）

国文学研究資料館では、二十万点に及ぶ古典籍に加え、明治以降の刊行（成立）年時をもつ近代文献を一万点近く収蔵しています。今回は、これら原典資料を集積することの意義、そして、資料間の相関を読み解くことで、日本文学をどのように活用し文化情報資源として学際的に拓いていくのかについて、一例を示したいと思います。

図1は明治十九年（一八八六）五月五日に仮名垣魯文が後藤昌文に宛てたハガキです。魯文は『西洋道中膝栗毛』『牛店雑談』『安愚楽鍋』『高橋阿佐夜叉譚』等の著作で知られる幕末明治の戯作者。後藤は明治四年に日本初のハンセン病治療専門医院・起廃病院を設立し、その生涯をハンセン病の治療と啓蒙活動に捧げた人物です。ハガキの文面は、顔に出来た腫れ物の経過報告が始まりますが、折しも一年前、起廃病院と同じ番地内に、皮膚病その他を診療する後藤診察所を新設していることが当時の新聞から傍証でき、そこに通院していたものと推察されます。さらには、両者の交友が十年程前から始まっていたことが、図2の資料からわかります。明治十年（一八七七）六月創刊の『起廃病院医事雑誌』は仮名垣魯文が編集人となって、自ら経営する仮名読新聞社から印刷発行した小冊子です（袋綴じ・八丁）。上掲図版は巻頭掲載の「後藤昌文先生小伝」で魯文の署名記事、次いで、仮名読新聞社員による治療薬の送付方法等説明の後、雑誌本文は、病者と後藤院長との問答形式に拠ってハンセン病治療に関する種々の疑問に答えるという体裁になっています。

「病家に孝子貞婦の困苦する者あらば書て吾社に寄給へ先生に請て薬品を施与すべし」と、治療薬無代送付の取次を買って出るなどした魯文の肩入れは、並々ならぬものと言えるでしょう。その魯文に宛て、起廃病院への入院を希望するので「該院規則書一部」「至急御通送相願候」としたためられた書簡（明治十一年七月二十五日付、差出人・橋本市左衛門 東京大学明治新聞雑誌文庫所蔵）からも、本誌の波及力の程が窺えます。一方、後藤昌文も、民間啓蒙と医療活動の広報誌的役割を担うものとして『起廃病院医事雑誌』を位置づけていたようで、希望が叶い本誌二十五部を警察分署に配布の旨、警視局より通達を受けたと明治十年十二月六日の新聞「かなよみ」に記されています。

『起廃病院医事雑誌』は二号で刊行を終えたようですが、その編集発行を契機として、魯文はハンセン病治療の啓蒙普及と患者の救済支援活動への取り組みを新聞雑誌上で展開することになります。不治の病として恐れられていたハンセン病（当時の呼称では「癩病」）を、加療・施薬により全治させるという強い意志のもと医療活動に邁進した後藤昌文、そして、彼を陰に日向に支えたジャーナリスト魯文の交友圏と文学的営為の種々相は、今後更なる資料の蓄積とその解明が待たれるところです。

（青田寿美）